

2018年2月4日の説教（要旨）

聖書 ローマの信徒への手紙 1章 8～15節

説教 「ともに励まし合うために」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ローマの信徒への手紙で、パウロは冒頭の挨拶に続き、感謝の言葉と自分が今切に願っていることを書き綴っています。

手紙の初めにまず感謝の言葉を書くのは、私たちの場合でも同じかもしれませんが、パウロが書くのはローマの人たちへの単なる儀礼的な感謝ではありません。パウロはまだローマに行ったことがないのです。けれども、彼はローマの人たちのことを「わたしの神に」感謝すると言っています。どうして神に感謝するのか、それは、まだ見ぬローマの町にも主イエスを信じる人たちの群れがあり、「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです」とパウロは書いています。

ローマの教会については、誰がどういう経過で伝道し指導したのかということが実はよく分かっていません。当時はまだ会堂もなく、おそらく家の教会のような形で集まりをもっていたのではないかと考えられます。それなのにこの言い方はちょっと大袈裟ではないかと思われるかもしれない。それに、ローマの教会でも、そこにはやはり人間的な争いや高ぶり、弱さや信仰理解の足りないところはあったに違いないのです。けれども、当時の世界の中心、富と権力とあらゆるこの世的な力が集まり花開いているローマの都に、片田舎のユダヤの地で生きて死なれた主イエス・キリストを、神と信じ、王とあがめて、その福音に生きている人たちがいるのです。そのこと自体が、何と驚くべきことか、全世界の注目に値することではないか、とパウロは神に感謝しているのです。

感謝の言葉に続いて、パウロは、いつかは何とかしてあなたがたのところに行きたいと願ってきたものの、まだ実現できていないことを述べています。パウロのローマ行きは花の都に上って一旗揚げようというものではありません。そこが最終のゴールだというのでもないのです。ローマ行きは彼の壮大な異邦人宣教のビジョンの一環でした。パウロは、ローマを拠点にしてさらに西方への伝道を考えていたのです。しかし、この手紙を執筆している今コリントにいるパウロは、マケドニア州とアカイア州で集めた献金を持って、まずエルサレムに行かなければならないと考えていました。それは彼にとって危険を伴う旅となることが予想されましたが、異邦人教会とユダヤ人教会の一致の証しのために、どうしてもそうせずにおれなかったのです。つまり彼はローマ行きの強い願いを持ちつつも、いったんは東のエルサレムに向かうのです。そして、その後「何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように」と願っていたのです（ローマ 15：22～29 参照）。

使徒言行録によれば、この後パウロはエルサレムに行きますが、皆が恐れていたようにそこで捕えられてしまいます。けれども、取り調べと裁判の中で、彼はローマ皇帝に

上訴することになり、その結果、囚人としてローマに護送されることになるのです。神のなさることは不思議です。パウロも周囲の誰もが予想しなかった道が、いくつもの出来事を通して実現していくのです。

そこまでして、何としてでもローマに行きたいと思うのは、「霊の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです」(11～12節)とパウロは書いています。「励まし合う」という言葉は、パウロがよく用いる「慰める」とか「勧める」という単語に、「共に」という接頭語が付いたものです。パウロは、自分に与えられた賜物によってローマの人たちの信仰を力づけたいと願うと同時に、自分もまたローマの人たちとの交わりの中で強められたいと願っているのです。

交わりというと、すぐにどのようにして仲良くなろうかとか、どんな楽しいことをしたらいいかということを考えがちです。しかし、教会の交わりで大事なことは、一人一人に必ず授けられている聖霊の賜物を分かち合い励ましあうことです。それは一方的に何かを教えるとか、してあげるということではありません。互いにイエス・キリストの恵みによって生かされていることを確かめ合うのです。一人一人が生きている状況は違い、抱える困難や重荷は違うとしても、福音に生かされていることを確認し合うのです。

宗教改革者カルヴァンはこの箇所です。次のような注解をしています。「使徒パウロは何と謙遜に語っていることか。彼は経験の浅い初心者からも、自分が力づけられることを拒絶しないのである。なぜなら、キリストの教会には、私たちのための益をもたらすことができないほど賜物に乏しい人は一人もいないからである」。聖霊の賜物は特別な人だけに与えられているわけではありません。主イエスを信じる一人一人に分け与えられています。それは分かち合われるべきものです。強い者も弱さや痛みを持つ者から教えられ、戒められ、励まされるのです。

いつも一人で説教しているように見える牧師も、そこで共に御言葉を聴く信徒の存在に支えられているのです。ときに、こちらが語る以上のことを豊かに聴き取っている人たちの証しや応答によって、励まされ育てられているのです。単なる聖書の知識やキリスト教思想であれば、書物を通してメディアやネットを通して学ぶことができます。だが、福音に生きるということは、共に集まること、そして共に祈ることなしには始まりません。そこに慰めの共同体としての教会の存在理由があります。

「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」(詩編 133 : 1)と歌われています。信仰の仲間がいること、教会につながっていることは、決して当たり前なことではありません。その恵みを忘れてはなりません。